

ONE LOVE 通信 45号

2011年12月11日発行

こんにちは。ただ今、帰国中であります。ルワンダに生活の拠点を移してから15年近く経つけれど、今年は例年以上に日本のことを考えた年になりました。3月にあの出来事があってから、日本はどう変わったのか？ そして自分自身は？ 来年は良い年になりますように。世界中の人々が、そんなことを考えながら、1年の終わりである12月を過ごしているのではないのでしょうか？



【決戦の時は来た。いざ韓国へ！】

さあ、アピリンピック韓国決戦の始まりです。

2007年静岡で行われたアピリンピック大会に初めて参加してから、もう4年。今回は3人の選手を引き連れて、やってきたのは韓国ソウル。総勢5人の珍道中。ここにたどり着くまでにもたくさんの出来事がありました。まずは大会までの道のりを。

参加選手集め。選手は誰でもいいわけではありませぬ。何に出場するか、誰を選ぶか…。とにかく今回参加したかったのは「義肢ソケット製作」部門。ワンラブの十八番ですからね。ひいきと言われても仕方がないが、選手はワンラブで働いている義肢装具士の中から選びたい。と言うことで、内部で選抜会。その結果、一番丁寧に仕事をしたガテテがその切符を手にしたのであります。

今回はガテテを含め3名の選手の参加を予定。あちこちの障害者に声をかけ、探すもののなかなか見つからない。キャラクター的にいいなと思って、手に技術を持っていなかったり、パスポートを持っていなかったり…。最終的に選ばれたのは聴覚障害者の二人、洋裁のネポムセン（以

下ネポ）と絵画のジェラルド。

ガテテはルワンダ選手団団長。大会中に行われる会議の出席や大会委員長・他の選手団団長との交渉あれこれ。もろもろの雑務は私、ルダシングワ真美。アピリンピック委員会と交渉し、参加費用・渡航費・宿泊費など、全て委員会で負担してもらうことが決定！ありがたや。

そして韓国に入国するための査証（ビザ）取り。日本人は短期間の滞在であれば必要ないけど、ルワンダ人はビザなしでは入れません。しかしルワンダには韓国大使館がない！どうするかと言うと、隣の国タンザニアまで取りに行かなくてはいけないのである。みんなのパスポートを預かり、ガテテと私はタンザニアの首都ダルエスサラームへ。しかし私はこの時、何十年かぶりに体調を崩し39度の熱。医者の方で処方してくれた薬を飲みつつ、灼熱のダルエスサラームをさ迷う。しかし大使館の人は優しく（大使館員にしては珍しい）、ルワンダからやってきたこと、タンザニア滞在費をあまりかけられないことを伝えると、通常三日かかる手続きを、翌日発給にしてくれた！ここでもまたありがたや。しかしこの時飲んでた薬が強すぎたのか、治って



からやたらと手足がかゆく、皮がむけてしまうのであった。脱皮をしてひと皮むけた状態で決戦に挑むのだ！

ルワンダに戻り、留守中の仕事の調整や愛しの猫たちにサヨナラの挨拶をしたりして、荷物を詰めたのは当日。こんなことから、いつも忘れ物ばかりなのである。

韓国までは遠かった。ケニアを経由してまずタイへ。ここで次の飛行機を待つこと11時間！ひたすらほげ〜とする5人。が！空港内でラーメン屋を発見！早速みんなにアジアの食文化を味わってもらおうと無理やり食べさせる。空港では同じように、することを失ったケニアの選手団もウロウロ（ケニアから同じ飛行機だった）。



韓国の空港にやっと到着。空港で韓国産おにぎりを発見。おにぎり大好きガテラは大喜び。そしてボランティアの人たちと記念撮影。

やっと韓国。空港ではボランティアの人たちが待っていてくれ、記念撮影をしたのちホテルへ。今日一日は何もなくて良いのである。午前中にホテルに着き、みんな疲れてそのまま爆睡。夜、目が覚めても食事に行くのが面倒で、ホテルの下のコンビニでカップラーメンを買ってきて、みんなでそれをすすりつつ、韓国初日の夜は更けるのであった（ちなみにネポとジェラルドはカップラーメン初体験）。

【そして大会は始まる】

一日目。今日は選手の登録手続きのみ。全員でそろそろ出かける必要はないので、ガテラと私だけ会場に行って登録。そしてオリエンテーション。他の3人はホテル周辺を散策。放浪癖のあるネポ、行方不明…。

二日目、開会式。まず会場近くのホテルで、大会参加者全員で昼食。国際色豊かである。肌の色もさまざま。バイキング形式の昼食は、多種多様な人たちが食べられるようにバラエティに富んでいる。そして韓国と言ったらこれ！キムチです。

ルワンダ選手団は、早速周りの人たちと交流。ネポとジェラルドは手話を使いながら会話。面白いなあと考えたのは、手話は国によって違うらしいけれど、共通点もたくさんあるらしく、下手に言葉を使って話をするよりも意志の疎通があるということ。なんだか手話を知らないことが悔しかったのだ。

開会式ではルワンダの国旗を持った女の子を発見して、一緒に写真を撮った。みんな自分の国の旗を持った子供がステージに立つと大歓声（選手たちは壇上には上がらず観客席）。

開会の挨拶や韓国の踊りなどがあり、極めつけは韓国の人気女性グループのステージ。さっき各国の旗を持って行進していた女の子たちは、舞台わきに立って黄色い歓声を送っている。う〜ん、この子たちは選手たちに出会うよりも、きっとこのお姉さんたちに会えた方が嬉しかったので

あろうなあ…。

三日目。いよいよ競技の始まりである。ルワンダ選手団、今日は義足ソケット作りと洋裁の二部門がある。同じ時間に競技があるので、ガテラと私はそれぞれネポ（洋裁）とガテテ（義足ソケット）について、ルールを一緒に聞く。

ネポはブラウスを6時間で縫い上げる。いろいろと細かい決まりがあり、その通りに作らないと減点の対象になってしまう。説明に使われる言葉は英語。ルワンダ団は英語があまり得意でないため、この時点で既に不利。しかもネポは耳が不自由なため、ガテラも私も勝手に創作した手話で説明をする。あとはネポの実力に任せるしかない。



洋裁なら任せておくと、はりきるネポ。非常に好奇心旺盛で、ホテル周辺をくまなく歩き回っていた。しかし時々行方不明となり、私の怒りを買ったのである。

ガテテも義足作りは自分の仕事であるからして、お茶の子さいさいであるが、しかし…。競技で使う材料は、普段ルワンダでは使っていない材料。通常、私たちはソケットを作るために、プラスチックのパイプを熱で軟らかくして使っている。でも今回使うのは、樹脂を混ぜ合わせ、それを硬化させて作るソケット。ガテテは日本で義肢製作の研修を受けて以来、その技術を使う場所はなかった。だからほとんどぶっつけ本番の状態である。

アピリンピックの会場は、スポーツの祭典と違って、シーンと静まり返っている。競技中は選手に話しかけることはもちろん、カメラのフラッシュ・携帯電話の使用も禁止だ。厳粛な空気に包まれて競技は進む。

静かに選手を見守るガテラと私。しかし二人とも競技中に国連に提出する障害者の権利宣言会議があるため、途中で抜けなくては行けない。う〜、もっと見ていたいのに…。

会議から戻ってくると、ちょうどネポのブラウスが出来上がったところだ。アイロンもかけ終わり、審査員に作品を渡す。

そしてガテテ、私が一番見たかった、型に合わせて樹脂を流し込む作業が既に終わってしまった。あとはきれいに仕上げをすればOKのようだ。しかしガテテの前の机で試合に挑んだ選手は、めったやたらと作業が早く、あっという間に出来上がってしまい、私たちが戻った時には既に姿を消していた。そのせいかガテテはその勢いに押され、変に焦っている感じだ。審査員には、日本の義肢装具士Mさんもいて、4年前の静岡大会でも審査員として活躍していた。今回はルワンダから初めて義足部門で参加するということを知り、競技前に何かとアドバイスをしてくれた。そのガテテがソケットを作り上げ、さあ審査員に作品を渡すという時になって、Mさんは私に耳打ちをする。「本当にもう終わっちゃっているの？」勝敗はソケットの質で決まる。いかに切断した足にフィットするか、きれいに仕上がっているかなどが採点の基準となる。だから時間はまだあるの

だから、納得がいくまで追求した方が良いのではとこっそり教えてくれる。本当は審査員がこういうことを教えるのも禁止なのだが、ほぼ初めての材料を使って奮闘しているルワンダ選手に対しての親心のようなものだろう。私もそっとガテテの側に寄って、そのことを伝える。時間を競い合うのではなく、質を追求すべしということ。そしてさらにしばらく続けた後、完成。ソケットを審査員に渡す。



ソケットを作るガテテと、それをじっと見つめるガテラ。ガテテは自分と関係ないことにも首を突っ込みたがる性格のようで、大切なことを話している時は、ちょっとうとうとした。

四日目。本日ルワンダ選手の競技はなし。オフである。午前中は会場に行き、上の階で行われている展示や催しを見る。ここには、おお何と素晴らしい！健康診断やマッサージもあるではないか！早速施術をしてもらおう私たち。極楽、極楽。そして韓国の衣装を着て記念撮影。実は私も着たかったけど、みんなが衣装を着て楽しんでいる写真を撮っているうちに時間がなくなってしまった。それから障害者向けの車両を展示しているブース。ガテラはこういうのには目がない。自分自身、車を運転している時、右足が不自由なため不便な思いをしているので、早速それを解決する車の部品を発見。まだ公に発売していないという新製品。粘って無理やり売ってもらって、品物は近々ルワンダに到着予定。

午後はソウル観光。バスに乗って景福宮と言う王宮に行った。ルワンダも昔は王宮があったため、みんなも興味深く説明を聞いている。韓国はいわゆる黒人をほとんど見か

けない。だから韓国の人たち、珍しそうに彼らを見ている。特にガテラのヘアスタイルは奇異に映るらしく、触りたがるおばちゃんや子供たち。ここでもおばちゃんは怖いものなし。パワー炸裂なのだ。



韓国の衣装を着せてもらうガテラ。ひげがある分、妙に似合っている気がするのは私だけだろうか…？本人まんざらでもなさそう。

どこに行っても困ったのはハングル文字。全く読めない。食事に行ってもメニューがわからん。食べたいものが注文できない悔しさ。コンビニでおにぎりを買っても、字が読めないから、中の具が何なのかわからない。おにぎりをさかさまにしてみたり、ひっくり返したりして海苔の隙間から中味を見ようとしても見えん！ここに来て初めてわかった。日本に来る外国人が、町を歩いていても何が書いてあるのかわからなくて、やたら戸惑っていること。その話を聞くと「そんなことないだろ。何となくニュアンスでわかるだろう」と思っていたのだが、おにぎりの中味がわからない時には本当に困った！これでやっと彼らの気持ちが理解できたのである。

五日目、ジェラルドの絵画。水彩、油絵どちらでも好きな方を選べる。我がジェラルドは水彩画。選手の中には、両腕が不自由で口で筆をくわえながら絵を描いている人もいます。絵のテーマは「花と情熱」。こういったテーマは先進国の人間には、何となく雰囲気わかる。しかし「情熱」という抽象的なテーマは、ルワンダのような国で生きている人たちには非常にわかりにくい。



ルワンダ事務所代表ガテラより

【ルワンダへようこそ！】

国を嫌いになるためには、その国でたった一人の悪人に出会うことで充分だ。つまり一人の心やさしい人間に出会うだけで、その国を好きになることができる。

この活動を始めてから、たくさんの国を訪れた。

また行きたい国、そしてよほどのことがない限り訪れたくない国。

空港でパスポートにスタンプを押してもらうたびに、世界の人々が平等であることを望んでいるにもかかわらず、そうでない現実を突きつけられる。

アフリカにルーツを持ち、ルワンダの国籍を持つということだけで、空港の出入国管理局で先に手続きを終わらせた真美と違う質問をされる。

「誰の招待でこの国を訪れるのか？」「所持金はいくら持っているのか？」「クレジットカードは持っているのか？」

右足に装具をつけているため、空港のセキュリティチェック

クでは、必ずブザーが鳴る。奥につれて行かれ、ズボンが脱がされたことも何度もあった。最近では、私より真美の方がその差別に敏感で、その状況を見て、時には出入国管理局の職員に食ってかかることもある。

そして無事に通過できても、その国で出会った心の貧しい人たち。

何年も前、日本から送ったコンテナの通関手続きをするため、ケニアのモンバサ港まで来ていた。自分たちの車に乗り、手続きを待つ。そして助手席に座っていた真美のネックレスが、窓から伸びてきた手によって突然引きちぎられた。大声で叫び、一緒に乗っていた私の弟も、泥棒の後を追いかける。でも周りにいた人たちはその泥棒を捕まえもしない。ただ見ているだけだった。

そこにいた全ての人が無関心であったわけではない。一人一人は悪くないと思っても、その一人の泥棒のせいで、そこにいた全ての人が悪人に思え、その地域が嫌いになった。

だから自分は心がけたい。ルワンダがそんなふうに見られないよう、この国を訪れてくれる人々を笑顔で迎えたいと。

実はジェラルド、韓国に着いてからやたらとルワンダに電話をかけたがる。国際電話は高いから、あまり無駄遣いするのではないよ…とっていたのだが、そのわけは。

なんと！韓国滞在中に女の赤ちゃんが生まれたのでありました！

で、その絵のテーマですが、私なりに「情熱」というものを説明しようと思うものの、うまく説明できず「赤ちゃんが生まれた喜びを絵で表現して」と言うふうになってしまった。完成した絵は、花と緑に囲まれたシマウマ。何の技巧が施されているわけでもない。でもまだ見ぬ赤ちゃんを思っ



ジェラルドの絵。
シマウマが可愛い。
赤ちゃんが生まれ、これから父親として責任重大。
3人の選手の中では、一番現実を見つめているかもしれせん。

アピリンピックにはいろいろな競技がある。例えば「料理」「ケーキのデコレーション」なんてのもある。会場には美味しそうな匂いが漂っていた。今度はこんな競技でもルワンダ選手は参加できそう。籠の製作、これもルワンダのお母さんたちの得意部門だけど、使っている材料が違うから難しいかな？ケニアから籠作りで参加していた選手、何度も国内外で賞をもらったことのある人だったけど、材料が違ったから、なかなか上手に編めなかった。どの国に行っても籠はあるけれど、材料でその国の特徴が出るのだなあと思った一コマ。

面白かったのは、いらなくなった物を利用してオブジェを作るという競技。特に先進国ではゴミ問題が深刻。何でもかんでも捨ててしまうのではなく、再利用しましょうというこの競技。CDや自転車のホイール、空き缶など思い思いの「ゴミ」を自分の国から持ち寄ってオブジェを作る。ガテラはとても興味深く眺めていた。きっとルワンダに戻ったら、何か新しいことを始めようと思っているに違いない。その目を見ればわかるのだよ。

そして全ての競技が終わりました。

六日目、閉会式。ああ、もうこれで終わっちゃうんだなと思うと、なんだか寂しい。あちこちで名残を惜しむように写真を撮り合う選手たち。6日間も一緒にいると、いつの間にか「仲間」になっている。そしてみんな「オレは競技に参加したんだぞ」という自信に充ち溢れている。そんなみんなを見ていると「選手として参加したら、もっと楽しいだろうな」と言う気持ちになってしまった。

結論として、ルワンダ選手は誰も入賞することができませんでした。でもそこにおいて、みんなの姿を見ていると、そんなことはどうでもいいことのように思える。

ルワンダの人たちは、なかなか国を出て、人に出会うチャンスがない。ラジオやテレビ・新聞などを通じて、世界の情報を得ることはできる。でも自分たちと違った国で生

まれて育った人たちに出会うことは、その人たちがルワンダを訪れてくれない限り、難しい。だから実際に自分たちで飛行機に乗って、いろいろな新しいものを見て、聞いて、触れて、自分の知識を増やしていくことの大切さを感じる。

私たちはそのチャンスを彼らに作るだけでもいいと思う。彼らが勝とうが負けようが、どうでも良い。

2階で行われていた展示会でペンダントを作るコーナーがあった。来た人はみんな無料でそれを作ることができる。お金を払わなくては作れないと思っていたジェラルドに声をかける。「誰でもただで作れるんだよ」って。そして嬉しそうに椅子に座って作り始めた。奥さんにあげるペンダントを。ジェラルドは赤ちゃんも生まれたけど、ついこの間結婚したばかりでもある。奥さんの写真を頼んでもいないのに、私に見せてくれた。その奥さんへのプレゼント。また心が温かくなった。

そんなことが体験できるだけでいい。韓国の食べ物を食べるだけでもいい。世界中の人と、手話を交えながら語り合うだけでいい。私自身、ルワンダの障害者に出会わなかったら、そんな機会もなかったはず。万歳！

アピリンピックが終わって、みんなはルワンダへ、私は日本へ。そしてテレビをつけるとタイの洪水のニュース。今まではそんなニュースを見ても「大変だな」くらいにしか思わなかったけれど、そこに知り合った人がいるかもしれないと思うと、そのニュースは一気に自分に近いものとなる。そうして世界はつながっていく。

相変わらず世界は一人の人間の死を、その人が独裁者であったという理由だけで大喜びする風潮にあるけれど、人とのつながりは、常に温かいものがにじみ出てくるものであってほしい。

2015年のアピリンピックはフィンランド。まだ行っていない北歐。果たしてそこではどんな出会いが待っているのか。早くも楽しみな私たちでありました。

待っているよ、フィンランド！決戦は4年後だ！



紹介します！ワンラブのスタッフ

8月にまた一人、ルワンダから義肢製作の研修員が日本にやってきました。

アシエルと言う名の男性。一目見たら、忘れられませんが。何故なら。とにかく背がでっかいから！

満員電車に乗っても、顔ひとつ分は確実に上に出ています。2メートル近い大男です。

アシエルは2007年にワンラブにやってきました。障害は持っていません。ガテラの知り合いの弟さんです。何をやるわけでもなく、日がな一日を過ごしている青年でした。「俺の弟に仕事を世話してくれ」と頼まれたのでしよう。義肢製作所で働いてもらうことになりました。第一印象は、まだ世間を知らない男の子という感じでした。



今号の患者さん

最初はもちろん見習いです。エマーブルやパトリックのやっていることを見ながら、技術を学んでいきます。そしてちょうどプルンジでの義足製作が忙しくなってきたところだったので、プルンジで作業をしてもらいます。

ワンラブの他の義肢装具士たちは、ディアネ以外みんな障害を持っています。だから荷物を運んだりするのが大変でした。しかし、飛んで火に入る夏の虫のアシエール。健常者で 体格が良いとなったら、みんなが利用しない手はありません。重いものを持つ時は、アシエール引っ張りだこです。少々気の毒な気がしないでもないけれど、まあ若いし、そのくらいやってもらうか…。



空港で甥っ子にハイハイを言うアシエール。この後、ケニアの空港で一泊するとは、まだ誰も知らない…。

日本出発の日。空港へは家族こそってお見送りです。しかしアシエールの体格の良さは「血」でありました。みんな男も女も背が高い。しかもおばちゃんたちは横にも大きかった。行ってらっしゃ〜い、アシエール。

やれやれと家に戻ってきて、一仕事していると電話。「モシモシ、アシエールです。今ケニアの空港から。乗った飛行機が遅れて、次の飛行機に乗り遅れた…」

なにっ！成田では研修を受け入れてくれる人たちが待っているというのに！焦って日本にメールを送り、その旨伝える。そしてさらにアシエールに向って怒鳴る。「飛行機が遅れたのはあんたの責任じゃないんだから、航空会社に次の飛行機に乗れるように手配させ、今日のホテルと食事の確保をさせよ！」しかし、アシエールはルワンダを出るのは初めて。しかも飛行機初体験。更に英語は不得意、ケニア公用語のスワヒリ語も今一つ…。大丈夫だろうか？

「モシモシ、今、次の飛行機に乗るように手配してくれている。空港待機です。でも食事は出してくれた」結局取れた飛行機は次の日の便。予想通り空港のロビーで一夜を明かすことになってしまった。

ケニア航空め！アシエールが旅人初心者だと思って、空港待機せよなどと言って、ホテル代を浮かせたな！本当はそっちが今日のホテルを用意しなくてははいけなくせにっ！

しかしアシエールが電話で言った一言が、私を母親冥利につきさせた。

「オレは男だから大丈夫」

う〜ん、かっこいいではないか。このセリフ、女を惚れさせますね。

それならば見せてもらおうじゃないか！その「男」とやらを。

ただ今、日本で研修真っ最中。男である以上、泣き言は言うなよ。どんどんしごかれろ！そしてもっと男になって帰ってこい！

6月にテレビの取材を受け、それをご覧になった人もいらっしゃるかと思います。今回はその時一緒に取材されたおじさんを。

ガクエバおじさん（48）は左足を切断しているため、両方の手に杖を持って歩いています。普段はイスラムの人たちが多く住む地域で、細々と修理屋さんを開いています。

「開いている」と言ってもお店を構えているわけではなく、道端に道具を置いて、お客さんが修理する品物を持ってくるまでひたすら待っているだけです。

子供は6人。こんなふうに修理屋をしているだけでは、家族を養うことができません。もっと積極的にお客さんを探さなくては。でも足が悪いので、なかなか自分でお客さんを探しに行くことができません。

…と言う訳で、ワンラブに義足を作りにやってきました。義足を作る前に、患者さんに必ず聞く質問があります。「義足を履いて歩けるようになったら、最初に何をしたい？」
「私は今まで両手で杖を使って歩いていたので、嫁さんの手を握って歩いたことがありません。だから一度でいいから嫁さんと手をつないで歩いてみたいです」



おじさんの家族。かわいらしい奥さんとの間には6人の子供がいます（写っていない子は独立あるいはお嫁に行きました）。家族のために一生懸命稼いで下さいね。

ああ、なんて素朴な願い。それならばワンラブがその願いをかなえてあげましょう。

今日は仮合わせの日。途中まで出来上がった義足を履いて歩行訓練です。奥さんも一緒についてきました。

初めての義足。歩き方もまだぎこちないです。義肢製作所の前の広場で、何度も何度も歩いてみます。そして少しずつ歩き方が上手になってきました。その姿をちょっと不安そうな顔で見つめる奥さん。

しばらく練習して、一休みしようと、義肢製作所の入り口のところに置いてあるベンチへ。

その時、奥さんが手を差し伸べてきました。その手を握りしめるおじさん。

その後、奥さんと手をつなぎながら、また歩く練習を始めました。何回も何回も…。

おじさん、奥さんの手のぬくもりはどうでしたか？

ささやかな願いだけど、誰もが欲しがっている願い。人のぬくもりは、何よりもありがたい。

ああ、この仕事やっていて良かった。おじさん、これからもしっかりと働いてね！



日本事務所より

【ただいま、ニッポン】

アピリンピックが終わって、ガテラと選手たちはルワンダへ、私はその足で日本に戻ってきました。今回の滞在は来年の1月下旬ころまで。

またいろいろところで、活動のお話をさせていただきます。ガテラもこの通信が皆さまの手元に届くころ、日本に到着。久しぶりに温泉に行けるかな？

今回は、心に不安を抱えながら日本に戻ってきました。それは相変わらず3月の震災の状況が、つかめていなかったから。東北地方の人たちは、どんなふうに毎日を過ごしているのだろう。家や道路や電車は、もう元通りになっているのだろうか？

帰ってきてわかったのは、あれからもう9カ月もたつというのに、被災者は厳しい冬を迎えているという現実でした。

日本の人たちが今も大変な思いをしている。今は被災者たちも、1円だって余分に必要であるに違いない。

そういう状況の中、私たちの活動のことも考えてくださり、ご寄付をくださった人たち、どうもありがとうございました。また、いろいろな形でご協力して下さった人たち、本当にありがとうございました。

日本を離れて長くなると、とても日本が恋しくなります。住みにくい、嫌なところもたくさんある日本だけど、やはり生まれて育った国。そう簡単に忘れられません。そしてその思いは年齢を重ねると共に強くなってきます。

3月の震災後、日本はどう変わっていくのか。そして私やガテラ、さらにワンラブはその日本とどう関わっていくのか。

活動を始めて15年。スタートした頃は、ルワンダにはほとんど日本人がいなかったけれど、最近はその数も増えてきました。それだけルワンダが歩きやすくなったという証拠です。街並みもすいぶんきれいになりました。

どんどん月日の過ぎるのが早くなり、2011年もあっという間に過ぎてしまいました。来年はどんな出来事がワンラブを待ちかまえているのか。

楽しいことがいっぱいだといいな～。でも現実には厳しいんだろうなあ。隠居生活に入れるのはいつの日か。

よっしゃ！体の動くうちは、まだまだがんばるぞ～！

【ご寄付ありがとうございました】

いつもながら貴重なご寄付や切手等をお送りいただき、心から感謝いたします。今年は地震被災地への義援金とも重なって、皆様も大変だったと想像しますが、それでもいただいたご寄付の重さを感じております。

ワンラブ通信44号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした。

7月	323,000円
8月	424,000円
9月	97,000円
10月	116,619円
11月	521,661円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	96本
装具	21本
杖	336人
車いす	8人

*今回はブルンジで巡回診療があったため、通常より大量の義足を配布しました。

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

【ワンラブ新体制】

前回お知らせしたように、ワンラブ日本事務所の体制が新しくなり、ルダシングワ真美の他にコアメンバーと名付けた6名が役割分担をし、毎月のように茅ヶ崎の事務所集まり、作業を進めるようになりました。

このほかにワンラブ通信の発送やイベント開催の際には、多くのボランティアが参加してくださり、そのおかげで日本での活動が順調に進んでいます。

今回はコアメンバーの担当をご紹介します。

ルダシングワ真美：日本事務所代表です。普段はルワンダでガテラと陣頭指導を取っていますが、日本に帰った時も休養どころが大忙し、各地での講演会をこなし、コアメンバーを指揮し、ワンラブ通信の原稿を書き、溜まった手続きと返事を片付け、そして…書き切れません。

中村征実：本当は修道院のシスターですが、ルダシングワ真美のお母さんのような存在です。事務作業一切の窓口となっています。

石川恵美：上記2名と共に、ワンラブ発足当初からのコアメンバーで、HPはこの人なくては存在しません。

志津野朋之：ワンラブ通信担当です。発行日程に関しては真美代表を督促できる立場です。原稿や漫画の手配から印刷、発送までの大作業を陣頭指揮します。

竹内公英：イベント担当です。グローバルフェスタやアフリカンフェスタのようなイベントの準備から当日のマネジャーをこなし、さらに後片付けまでも責任者です。

鈴木準二・佳子：名簿と会計の担当です。実に面白いコンビ。二人の会話は絶妙です。

【おことわり】

*発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

*当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 TEL: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信 45号 2011年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project